

鹿児島県総合教育会議資料

学力調査の結果を踏まえた対策について

県教育庁義務教育課
平成30年11月2日

平成30年度全国・学力調査の結果について

◆ 調査の概要

1 期 日

平成30年4月17日（火）

2 概 要

- 対象学年： 小学校第6学年，中学校第3学年
- 対象教科： 国語，算数（数学），理科（3年に1回）
- 調査内容： 国語，算数（数学），理科
国語，算数（数学）は，主として「知識」に関する問題「A問題」と，主として「活用」に関する問題「B問題」を出題。理科については，「知識」に関する問題と「活用」に関する問題を一体的に出題。
また，生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査を実施。

3 鹿児島県の参加状況（※ 公立学校）

- 学校数及び児童生徒数
小学校： 500校（14,276人）
中学校： 221校（13,613人）
計721校（27,889人）
（※ 小学校，中学校にはそれぞれ義務教育学校を含む。）

4 全国の参加状況（※ 公立学校）

- 学校数及び児童生徒数
小学校： 19,386校（1,030,031人）
中学校： 9,597校（967,196人）
計28,983校（1,997,227人）

5 本県の学力調査の結果(公立学校分)

- 小学校では、算数Aが全国平均と同程度であった。一方、国語A、国語B、算数B、理科が全国平均を下回った。
- 中学校では、国語・数学のA・B、理科ともに、全国平均を下回った。

※ A問題(主として「知識」に関する問題)、 B問題(主として「活用」に関する問題)

ア 小学校(A問題・B問題)正答率 (正答率については、平成28年度から整数値で表記、中学校も同様)

	教科		平成30年度			平成29年度		
			県平均正答率	全国平均正答率	(参考) 全国平均との差(*)	県平均正答率	全国平均正答率	(参考) 全国平均との差
小学校 (6年)	国語	A	70	71	-1	75	75	0
		B	53	55	-2	55	58	-3
	算数	A	64	64	0	79	79	0
		B	49	52	-3	45	46	-1
	理科		59	60	-1	63.4	60.8	2.6

※ 理科は小、中ともに、平成27年度

イ 中学校(A問題・B問題)正答率

	教科		平成30年度			平成29年度		
			県平均正答率	全国平均正答率	(参考) 全国平均との差(*)	県平均正答率	全国平均正答率	(参考) 全国平均との差
中学校 (3年)	国語	A	75	76	-1	75	77	-2
		B	58	61	-3	70	72	-2
	数学	A	64	66	-2	61	65	-4
		B	45	47	-2	46	48	-2
	理科		65	66	-1	51.9	53.0	-1.1

(*) 別々に四捨五入された県平均正答率・全国平均正答率の差であるため、実際の差を四捨五入した場合と数値が異なる場合もある。

ウ 今後の取組

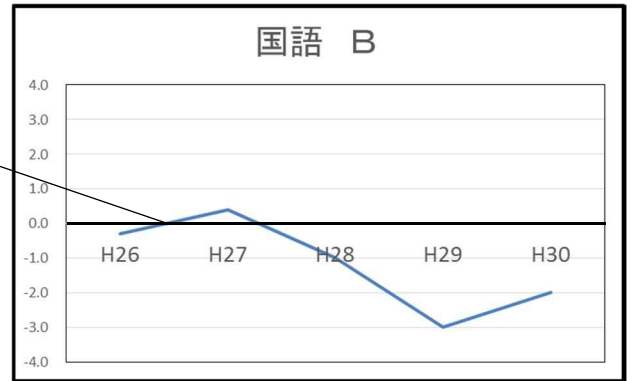
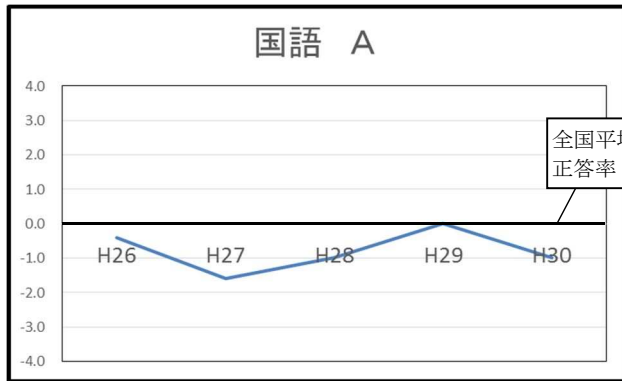
- 全国的に「主体的・対話的で深い学び」の視点による学習指導の改善を行う学校の方が平均正答率が高い傾向が見られることから、新学習指導要領の実施を見据え、この視点からの授業改善を一層推進する。
- 「かごしま学力向上支援Webシステム」に掲載している思考力、判断力、表現力等を育成するための評価問題及び基礎・基本に関する問題等を更に充実させるとともに、授業や単元末などで活用させ、定着させる取組を徹底していく。
- 県教委、県総合教育センター、市町村教委が今まで以上に連携を図り、支援チームを学校に派遣する「学びの組織活性化」推進プロジェクトを通して、校内研修の充実や授業づくり等の支援を行うとともに、各学校においては学力向上担当教員を中心とする組織活性化を促す取組を実践し、学力向上のPDCAサイクルの充実を図る。
- 県教委として、上記の取組を徹底し、学力向上の成果が出るよう、市町村教育委員会や各学校に対して働き掛けを行っていく。

全国学力・学習状況調査「国語科」 本県の5年間の推移
 (全国平均正答率との差)

【小学校】

A問題：主として「知識」に関する問題

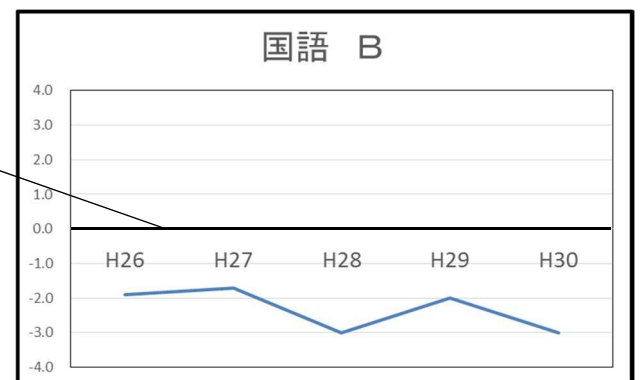
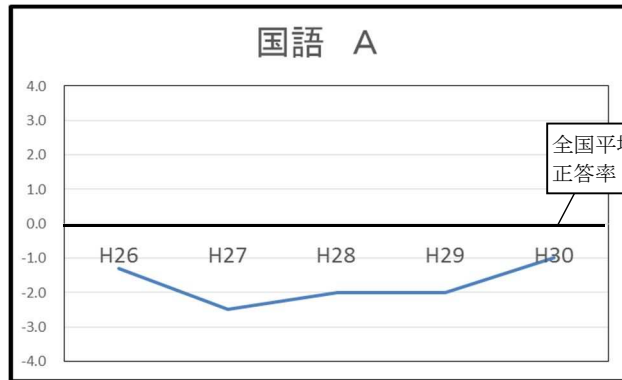
B問題：主として「活用」に関する問題



【中学校】

A問題：主として「知識」に関する問題

B問題：主として「活用」に関する問題



全国学力・学習状況調査の結果改善に向けた取組

県教育庁義務教育課

全国学力・学習状況調査において、学力向上の成果が表れるよう、次の取組を徹底する。

1. 学力向上に向けた学校の組織的活動の推進等

- ① 「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善
各学校に、学力向上支援チーム（大学教授，県総合教育センターの研究主事，県教委・市町村教委の指導主事等）を派遣し，校内研修や授業づくり等を支援（学びの組織活性化推進プロジェクト）
- ② 「思考・表現（知識の活用）」に関する演習問題の計画的・継続的な実施
 - ・ 学習内容が定着するよう，基礎・基本に関する問題，「思考・表現（知識の活用）」など，演習問題を提供し，各学校における活用を促進（かごしま学力向上支援Webシステム）
 - ・ 本年度は，問題をまとめたデータをCD-Rで全学校に配布
- ③ 学習内容が十分定着していない子供への補充指導，個別指導の実施要請

2. 市町村教育委員会に対する指導・助言

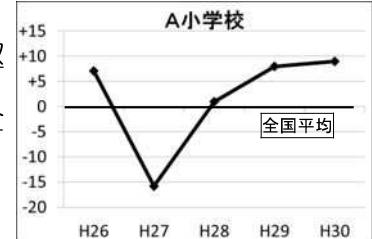
- 主な要請内容
 - ・ 学力調査に対する意識改革
 - ・ 学力調査結果の市町村教育委員会ごと，学校ごとの分析と対応策の検討，及び対応策の実施
 - ・ 学力調査結果の公表及び家庭等との課題の共有
 - ・ 家庭学習の充実及び規則正しい生活習慣の確立

特集 2

成果があった具体的な取組事例
＜小学校編＞

A小学校は、「学力向上推進委員会」を中心に、学校の組織を活性化するために校内研修の充実を図り、学校全体で授業改善、学力向上に取り組んでいる。

全国学力・学習状況調査において、各教科の合計が平成29年度は全国8ポイント上回っており、平成30年度は9ポイント上回った。特に、算数のA問題については、平成29年度は2ポイント、平成30年度は、7ポイント上回るなど、連続して上昇傾向にある。



A小学校で「成果があった取組」

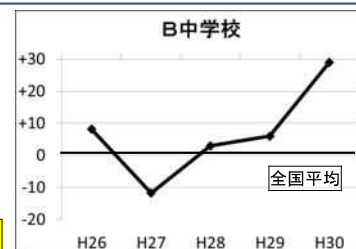
- ・ 教員が組織として学力向上に取り組もうとする研修体制の整備を図り、ワークショップ型研修などに取り組むことで、教員の参画意識が高まり、共通理解したことが実践できている。
- ・ 全国学力・学習状況調査、鹿児島学習定着度調査について、児童がどんな間違いをしているか、問題ごとに「誤答分析」を行った。明らかになった課題については、年間指導計画に追加して授業で重点的に取り扱うなど、授業改善に生かしている。また、正答率が低い問題については、放課後に補充指導や個別指導等を行い、定着を図っている。
- ・ 研究授業・授業研究の際は、大学教授などの学力向上支援チームからの専門的な指導・助言により、教員は意識が高まり、「主体的・対話的で深い学び」の実現について、日々の授業改善に生かしている。
- ・ 毎時間、授業の終末には「振り返りの時間」を設定し、学習内容や「分かったこと、できたこと」などを、児童自身の言葉で振り返らせている。

その他の学校で「成果があった取組」

- ・ 全教員が年1回の研究授業を実施し、相互に参観し合って、授業研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図っている。
- ・ 活用する問題を意識して、全ての授業で「書く活動」を意図的・計画的に設定し、文章や図表などを活用させたり、字数制限を課して書かせたりしている。
- ・ 重要語句等について、小テストやフラッシュ型教材を繰り返し活用して、基礎・基本の定着を徹底している。
- ・ 「単元テストは100点を取るまで何回もやり直させる」など、確実な見届けを行っている。
- ・ B問題を意識して、過去問や「かごしま学力向上支援Webシステム」の単元別評価問題に、授業や家庭学習等で取り組ませるとともに、ファイリングさせて振り返らせるようにしている。

成果があった具体的な取組事例 ＜中学校編＞

B中学校は、生徒の自己有用感や自己肯定感を高める取組を行っており、話し合いや学び合いを充実させて、生徒の学力を向上させている。全国学力・学習状況調査は、3年前は全ての問題で全国平均を下回っていたが、平成30年度は全ての問題で全国平均を上回り、特に、数学Aは9ポイント、数学B・理科は7ポイント上回った。



B中学校で「成果があった取組」

- ・ 特別活動等で「人間関係づくり」に取り組むとともに、月に1回程度、教科ごとに「学び合いの時間」を設定することで、グループで生徒同士が分からないところを話し合ったり、教員に質問したりして解決していく取組を充実させ、学力を定着させている。
- ・ 目標をもって授業や学校生活に取り組めるよう、1年生のときから卒業生による職業講話や高校教員による講話を聞くなどキャリア教育を充実させている。
- ・ 次週の家庭学習の計画を立てさせ、週末課題や宿題等に確実に取り組ませるとともに、課題が提出できない生徒へ補充指導を行うなどの支援を行っている。

C中学校は、朝の時間や放課後を活用した補充指導、個別指導に取り組み、生徒ができるまで、「見届け」をしっかりと行っている。

全国学力・学習状況調査において、平成30年度、全ての問題で全国平均を上回り、特に、国語Aは8ポイント、国語Bは9ポイント、理科は7ポイント上回った。

C中学校で「成果があった取組」

- ・ 教科の壁を越えてワークショップ型の校内研修を行うことで、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善について、共通理解し実践している。
- ・ 教員間で日常的に、授業内容や生徒の学びについて話題に上るような環境をつくり、一人一人の生徒ができるまで、授業の終末での「振り返り」と家庭学習の「見届け」をしっかりと行っている。
- ・ 朝の時間を活用した「補充指導の時間」を週に1～2回設定したり、生徒が質問に来る個別指導の時間を放課後に設定したりするなどの取組を行っている。

その他の学校で「成果があった取組」

- ・ 教科担任が3学年を通して受け持つ「縦持ち」を実施していることが、教員が教科の系統性を意識したり、教員同士で資料を交換したり、テスト問題作成や指導過程について意見を交わしたりするなど、指導力向上につながっている。
- ・ 全国学力・学習状況調査結果を、定着が不十分な問題の誤答を中心に、教科ごと、学級ごとに細かに分析し、生徒がつかずいているところを明確にして、指導に生かしている。
- ・ B問題を意識して、「かごしま学力向上支援Webシステム」の単元別評価問題に授業や家庭学習等で取り組ませるなど積極的に活用している。

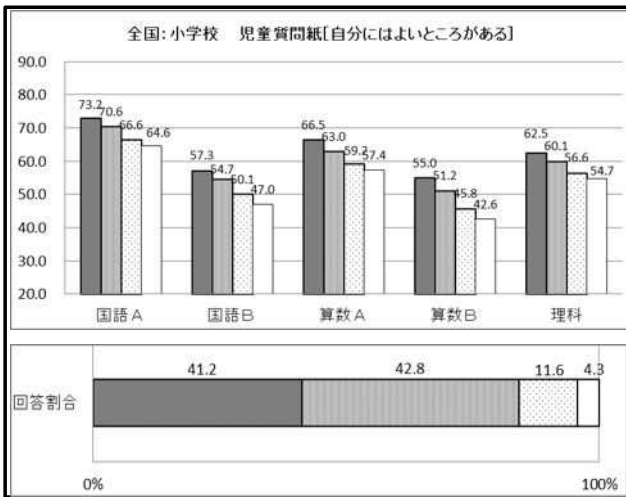
特集 4

児童生徒の自己有用感を高める集団づくり

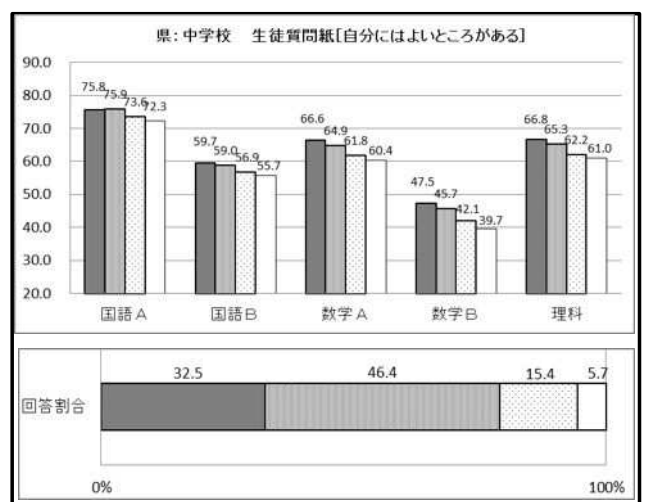
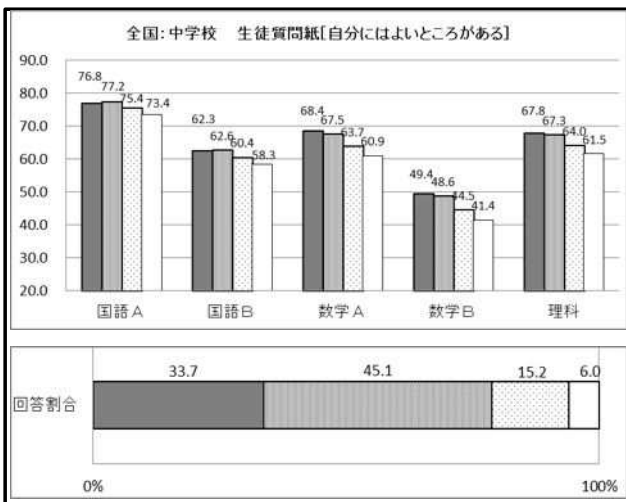
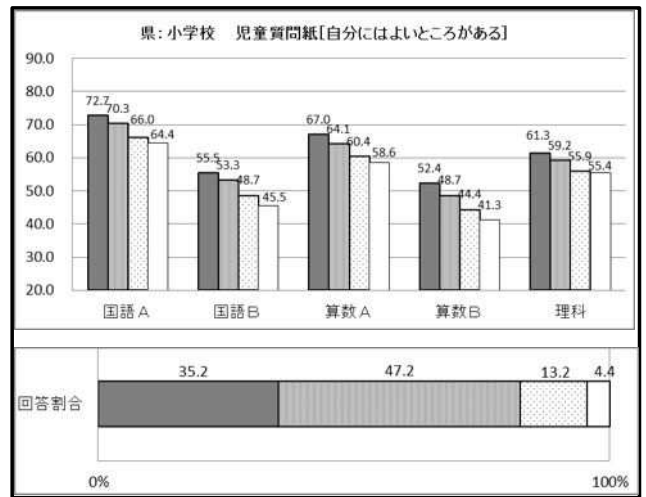
「日頃から児童生徒のがんばりを認める教師の関わり方」や「児童生徒が互いによさを認め合える学級集団づくり」が大切だと言われます。児童生徒の自己有用感と学力には相関関係が見られます。

「自分には、よいところがあると思う」と回答している児童生徒の方が、教科の平均正答率が高いという傾向が見られます。

【全国】



【本県】

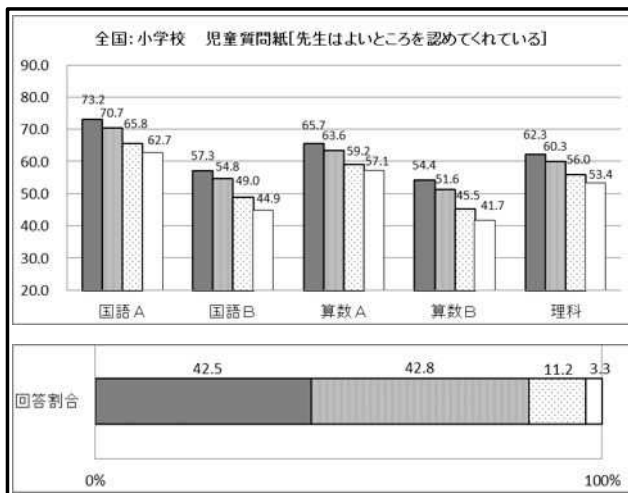


■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる □ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

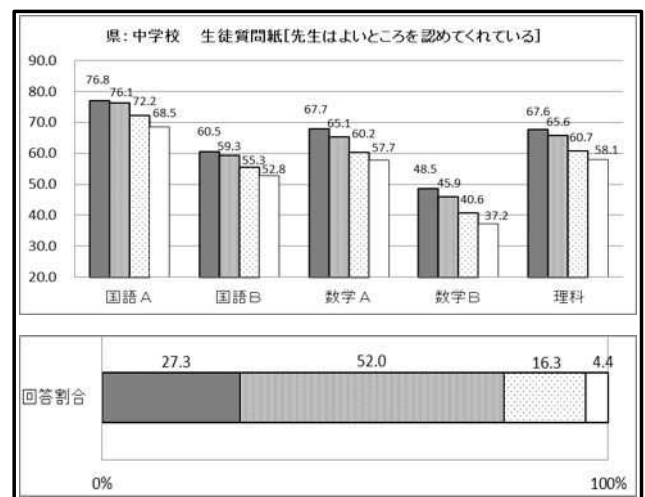
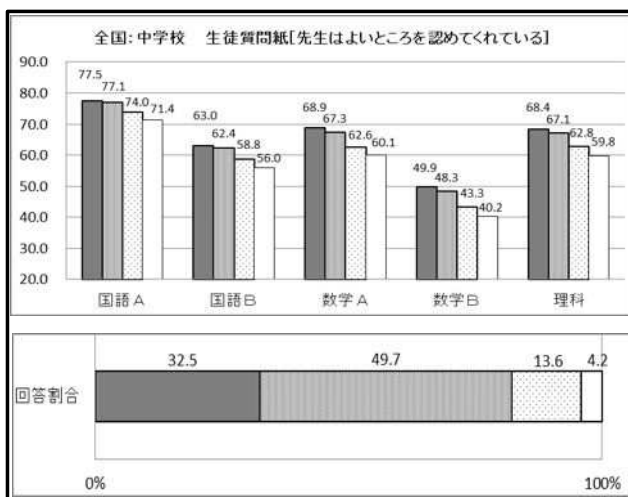
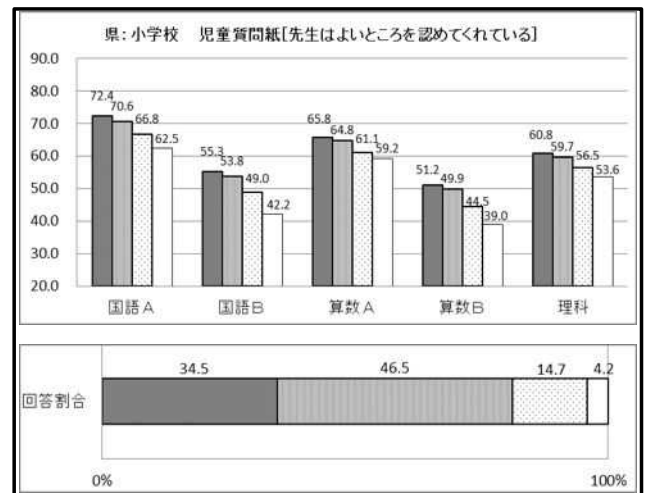
「自分には、よいところがあると思う」と肯定的に回答した児童生徒の割合は、全国的に増加傾向にあり、これは鹿児島県も同じです。県の肯定的な回答の割合は、10年前と比較すると、小学校は7.7%、中学校は17.2%増加しています。

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答している児童生徒の方が、教科の平均正答率が高いという傾向が見られます。

【全国】



【本県】



■当てはまる ▒どちらかといえば、当てはまる □どちらかといえば、当てはまらない □当てはまらない

全国の分析によると、「先生に認められている」と感じている児童生徒は、「自分にはよいところがある」という自己有用感が高い傾向があります。教師の言葉が生徒の自己有用感につながり、それが学びへの主体性や学力そのものにつながっていくものと考えられます。

◎ 発表の場面をつくり、しっかりほめる。

※ 自己有用感と学力の関係は、小・中学校ともに、全ての教科で「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒ほど、平均正答率が高い傾向が見られます。この傾向は、本県でも全国と同様です。本県の児童生徒の自己有用感については、昨年度と比べ少し高くなった項目もありますが、全国と比べ全般的に低い状況にあります。

授業等において、友達と語り合う場面をできるだけ多くつくり、友達の話聞き、自分の考えや意見を発表するという経験をさせましょう。また、発表をしたときは、「しっかりほめる」など認め励まししながら、児童生徒の自己有用感を高める学級集団づくりに取り組みましょう。

課題3 <A問題> 設問番号 9 (1)

【設問の概要】

比例 $y = ax$ における比例定数 a の意味を理解している。

9 次の(1)から(3)までの各問いに答えなさい。

(1) 比例 $y = 5x$ の x の値とそれに対応する y の値の関係について、下のアからエまでのの中から正しいものを1つ選びなさい。

- ア x の値と y の値の和は、いつも5である。
- イ y の値から x の値をひいた差は、いつも5である。
- ウ x の値と y の値の積は、いつも5である。
- エ x の値が0でないとき、 y の値を x の値でわった商は、いつも5である。

【平均正答率(%)】				
9 (1)	本県	全国	差	自校
	61	66	-5	

<本県の主な誤答傾向>

正答	選択肢	類型 (%)
	アと解答	8
	イと解答	11
	ウと解答	19
◎	エと解答	61

問題点とその改善点

- 「ア」、「イ」、「ウ」と解答した生徒が合計で38%もいる。比例の関係や比例定数の意味を正しく理解していない生徒がいる。
- y が x に比例するとき、 y と x の関係を表に表し、そこから x と y の間にどのような関係があるかを調べ、 x と y の対応関係や変化の様子を捉える活動を取り入れることが考えられる。
- 指導に当たっては、表、式、グラフにおいて、どのような特徴として表されるかを言葉で説明する活動を取り入れることが考えられる。本設問の式の場合、「 y を x でわると5になり商が一定で、比例定数に等しい」というように説明させる活動を取り入れる。

課題4 <A問題> 設問番号 12

【設問の概要】

一次関数の意味を理解している。

12 1500 m の道のりを歩きます。 x m 歩いたときの残りの道のりを y m とします。このとき、 x と y の関係について、下のアからエまでのの中から正しいものを1つ選びなさい。

- ア y は x に比例する。
- イ y は x に反比例する。
- ウ y は x の一次関数である。
- エ x と y の関係は、比例、反比例、一次関数のいずれでもない。

【平均正答率(%)】				
12	本県	全国	差	自校
	31	36	-5	

<本県の主な誤答傾向>

正答	選択肢	類型 (%)
	アと解答	12
	イと解答	31
◎	ウと解答	31
	エと解答	25

問題点とその改善点

- 「イ」と誤って解答した生徒が31%いる。この中には1500mの道のりを歩いた距離が増えると残りの道のりが減っていくと捉え、 x が増えれば y が減るとして反比例と考えた生徒がいると考えられる。
- 具体的な事象の中から2つの数量を取り出し、それらの変化や対応の様子を調べることを通して、2つの数量の関係が一次関数であるかどうかを判断することができるように指導することが大切である。
- 指導に当たっては、本問題を用いる場合は、 x と y の関係を $x + y = 1500$ のような式で表し、この式を $y = -x + 1500$ と変形し、一次関数と判断する場面を設定することが大切である。また、併せて一次関数の特徴を説明できるようにもしたい。

今回は関数領域から11問の出題がありましたが、本県は、全国の平均正答率を上回ったものは1問しかありませんでした。なぜ、関数領域の定着が低いのか各学校で分析する必要があります。この結果からは、これまで比例・反比例の定着がなされていないまま一次関数へと進んだり、一次関数の学習が定着していないまま二乗に比例する関数に進んだりと、一次関数の単元に進む場合には、当該単元に入る前に十分に関数の表、グラフ、式を設定し、確認したり、新たな関数の特徴を発見させたりするなど丁寧に学習を進め、必要があれば1次関数の問題が第3学年の4月までできないというこは、十分に定着が図られないまま進んでしまっているのではないかと考えます。授業時数を確保して、それぞれの特徴を記述させたり、説明させたりし、繰り返し確認をしながら定着を図りましょう。

理 科【中学校第 3 学年】

正答の状況

種 別		平成 3 0 年度			平成 2 7 年度		
		全体	A 問題	B 問題	全体	A 問題	B 問題
平均 正答数	県	17.5問/27問	7.4問/11問	10.1問/16問	13.0問/25問	4.6問/7問	8.4問/18問
	全国	17.9問/27問	7.5問/11問	10.4問/16問	13.3問/25問	4.5問/7問	8.8問/18問
平均 正答率	県	65%	67%	63%	51.9%	65.4%	46.6%
	全国	66%	68%	65%	53.0%	63.8%	48.8%

今回の調査結果から明らかになった課題

- 課題 1 < A 問題 >** 地震の揺れの強さが震度であること、S波による揺れが主要動であることなどの基礎的・基本的な知識を身に付けていること
- 課題 2 < B 問題 >** 理科室で再現が困難な自然の事物・現象と、モデル実験の装置や操作とを対応させた実験を計画すること
- 課題 3 < B 問題 >** 自然の事物・現象の「原因として考えられる要因」を全て挙げ、問題解決の知識・技能を活用して、条件を制御した実験を計画すること

課題が見られた問題の概要、問題点とその改善点（A問題）

課題が見られた問題の概要

課題 1 < A 問題 > 設問番号 7(1)

7 「緊急地震速報による避難訓練」の後、理科の授業で地震の学習を行い、科学的に探究しました。

(1) から(3) までの各問いに答えなさい。



理科の授業場面 1



緊急地震速報は、震源に近い地震計でP波をとらえ、S波による強い揺れが起こる可能性があることを一斉に知らせる仕組みです。

(1) 地震の揺れの強さを何といますか。また、S波による揺れを何といますか。それぞれ下のア、イから1つ選びなさい。

地震の揺れの強さ	ア マグニチュード	イ 震度
S波による揺れ	ア 初期微動	イ 主要動

【設問の概要】

地震の揺れの強さが震度であること、S波による揺れが主要動であることの知識を身に付けているかどうかをみる。

【平均正答率 (%)】

設問番号	本県	全国	差	自校
7(1)	51	55	-4	

<本県の誤答傾向>

正答	選択肢		類型%
	地震の揺れの強さ	S波による揺れ	
1	アと解答	アと解答	7
2		イと解答	22
3	イと解答	アと解答	20
◎ 4	イと解答	イと解答	51
99	上記以外		0
0	無解答		0

※ 解答類型 1, 2 の誤答率は計 29%

問題点とその改善点

- 本県の正答率は51%で、全国より4ポイント低い。また、地震の揺れの強さをマグニチュードと誤答している生徒は29%おり、地震に関する基礎的・基本的な知識が身に付いていない。「地震と火山」の単元は中1で学習する内容である。調査前に出題範囲を確認し、生徒に復習を指示するなど、調査を意識した取組ができていない。
- 東日本大震災や北海道胆振東部地震が発生するなど日本は地震大国である。理科で地震に関する知識を身に付けることは、自他の安全や生命を守り、防災や減災に生かす上で大切なことである。指導に当たっては、生徒が理解できるまで繰り返し指導するとともに、緊急地震速報を取り上げ、その仕組みについて調べたり発表させたりするなど、「理科を学ぶことの意義や有用性を実感できる」ようにしていく。

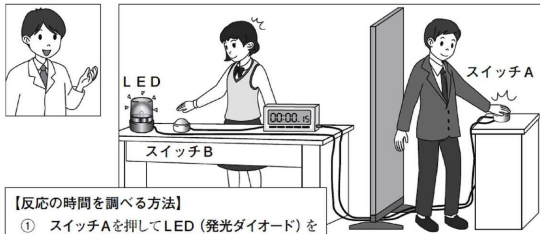
課題が見られた問題の概要、問題点とその改善点（B問題）

課題が見られた問題の概要

課題2 < B問題 > 設問番号 5 (2)

日常生活との関連を考える場面

先生：「反応の時間を測定する装置」で刺激に対する反応の時間を測定したら、約0.2秒でした。



【反応の時間を調べる方法】

- ① スイッチAを押してLED（発光ダイオード）を点灯させる。
- ② LEDの点灯を見たらスイッチBを押す。
- ③ ①から②までの時間が表示される。

先生：ところで、バスの注意書きの「お客様へお願い」を見たことがありますか。なぜ話しかけてはいけないのでしょうか。

生徒：信号を見てブレーキを踏むのが遅れるからだと思います。

先生：なるほど。でも、信号を見てブレーキを踏むのが遅れることを確かめることはできません。



そこで、運転中の運転士に話しかけてはいけない理由を探究するために、「反応の時間を測定する装置」を使って確かめることができる実験を計画しましょう。

生徒：私たちの実験の計画は、「運転士が信号を見てブレーキを踏む」ことを、 Y こととして確かめます。

スイッチ Z を押す人が話しかけられる場合と話しかけられない場合で、反応の時間を比べます。

(2) Y Z に適するものを、それぞれ下のア、イから1つ選びなさい。

Y	ア 「スイッチAを押してLEDを点灯させる」
	イ 「LEDの点灯を見たらスイッチBを押す」
Z	ア A
	イ B

【設問の概要】

反応の時間を測定する装置や操作を刺激と反応に対応させた実験を、計画できるかどうかをみる。

【平均正答率（%）】

5 (2)	本県	全国	差	自校
	58	63	-5	

<本県の誤答傾向>

正答	選択肢		類型%
	地震の揺れの強さ	S波による揺れ	
1	アと解答	アと解答	4
2		イと解答	14
3	イと解答	アと解答	23
◎ 4	イと解答	イと解答	58
99	上記以外		0
0	無解答		1

問題点とその改善点

- 本県の正答率は58%で、全国より5ポイント低い。「運転士が信号を見てブレーキを踏む」ことを、「LEDの点灯を見たらスイッチBを押す」操作と解答できた生徒は81%いる。しかし、その内の23%は、始めにスイッチAを押す生徒を「運転中の運転士」と間違えて捉えており、全国よりも3ポイントも多い。自然の事物・現象を、実験の装置や操作に対応させて「実験を計画する」ことに課題がある。
- 生徒が実験を計画する際に、自然の事物・現象と実験の装置や操作との対応を思考する学習場面を設定させたい。指導に当たっては、自然の事物・現象と実験の装置や操作との関係を、ノートやワークシートに図示させるなど、論理的に思考させるようにする。

(1) 児童 【小学校】

本県の児童には、全国と比べてこんな良いところが！

- 「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」
55.0%（全国比+18.9%）
- 「学校の授業以外に、普段（月～金）1日当たり1時間以上勉強をしている」
72.6%（全国比+ 6.4%）
- 「将来の夢や目標を持っている」 88.2%（全国比+ 3.1%）
- 「算数の勉強は好きである」 68.1%（全国比+ 4.1%）
- 「理科で観察や実験を行うことは好きである」
92.5%（全国比+ 2.7%）

伸びているところは…

- 「人の役に立つ人間になりたいと思う」
95.1%（前年度比+2.9%）
- 「家で学校の宿題をしている」
97.7%（前年度比+0.2%）
- 「家で自分で計画を立てて勉強をしている」
64.4%（前年度比+3.0%）

気を付けたいところは…

- 「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思う」 57.3%（前年度比-4.5%）
- 「先生は、自分のよいところを認めてくれていると思う」 81.0%（前年度比-2.7%）
- 「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」
75.9%（前年度比-1.6%）

※ 社会参画に対する関心・意欲やボランティアへの意識が高く、人の役に立ちたいという強い思いをもって将来の夢や目標を描き、前向きに頑張っている児童が多い。しかし、先生が自分のよいところを認めてくれているという児童が減少傾向にあり、児童の自己有用感を十分に育てていない。

※ 宿題など家での基本的な学習習慣は身に付いていると考えられるが、毎日の就寝時刻など基本的な生活習慣に関わる項目に対する望ましい回答が低下してきている。

※ 算数の勉強や理科の実験などは好きだという気持ちがあるので、その児童の学習への関心・意欲をもっと高めながら学力の定着につなげていく必要がある。

※ 思考力、判断力、表現力等を育む授業づくりを目指しているところであるが、児童が自分の考えを工夫して発表する取組が十分ではない。

(2) 生徒 【中学校】

本県の生徒には、全国と比べてこんな良いところが！

- 「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」
61.3%（全国比+9.5%）
- 「今住んでいる地域の行事に参加している」
50.9%（全国比+5.3%）
- 「学校の授業以外に、普段（月～金）1日当たり1時間以上勉強をしている」
75.8%（全国比+5.2%）
- 「家で、学校の宿題をしている」
95.4%（全国比+3.8%）
- 「観察や実験を行うことは好きだ」
87.7%（全国比+5.6%）
- 「数学の学習は、将来社会に出たときに役に立つと思う」
76.8%（全国比+3.9%）

伸びているところは…

- 「自分には、よいところがあると思う」
78.9%（前年度比+10.6%）
- 「人の役に立つ人間になりたいと思う」
95.3%（前年度比+2.9%）
- 「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」
96.4%（前年度比+2.0%）
- 「将来の夢や目標を持っている」
73.5%（前年度比+1.5%）

気を付けたいところは…

- 「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思う」
46.7%（前年度比-3.5%）
- 「毎日、同じくらいの時刻に起きている」
91.5%（前年度比-1.6%）
- 「家で自分で計画を立てて勉強をしている」
50.8%（前年度比-0.7%）

- ※ 社会参画に対する関心・意欲やボランティアへの意識が高く、いじめを許さない姿勢や人の役に立ちたいという思いをもって、前向きに頑張っている生徒が多い。
- ※ 学校の授業以外に勉強時間を設け、家で宿題をするなど、基本的な学習習慣は身に付いていると考えられるが、毎日の起床時刻など基本的な生活習慣に関わる望ましい回答が低下してきている。
- ※ 理科の実験などの学習への関心・意欲は高く、数学の学習は社会に出たときに役立つという実感をもって学習に臨むなど、学習の重要性は十分理解している状況があるので、生徒のその思いに応え、学力を伸ばしていく必要がある。
- ※ 思考力、判断力、表現力等を育む授業づくりを目指しているところであるが、生徒が自分の考えを工夫して発表する取組が十分ではない。

家庭における学力向上への取組について

<学力の状況>

鹿児島県の子供たちの学力については、例年、全国学力・学習状況調査において全国平均を下回っており、厳しい状況にあります。

<なぜ学力が必要なのか>

- 子供たちが夢や希望をかなえるためには、確かな学力を身に付ける必要があります。学力が十分定着していないと、子供たちの自己実現の可能性が狭められ、将来に大きな影響を与えてしまいます。
- また、これからの時代は、AI、IoTなどの情報技術の進展により、今まで以上に予測困難な社会となります。子供たちには、社会や経済の変化に対応するため、思考力、判断力、表現力等を身に付けさせ、主体的に学習に取り組む態度を育成することが必要です。

<対策>

このようなことから、鹿児島県教育委員会では、全国学力・学習状況調査において、学力向上の成果がでるよう、次の取組を各市町村教育委員会や学校と連携して進めていきます。

- ① 「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を図ります。
 - ・ 各学校に、学力向上支援チーム（大学教授，県総合教育センターの研究主事，県教委・市町村教委の指導主事等）を派遣し，校内研修や授業づくり等を支援（学びの組織活性化推進プロジェクト）
- ② 「思考・表現（知識の活用）」に関する演習問題を計画的・継続的に実施します。
 - ・ 学習内容が定着するよう，基礎・基本に関する問題，「思考・表現（知識の活用）」など，演習問題を提供し，各学校における活用を促進（かごしま学力向上支援Webシステム）
 - ・ 本年度は，問題をまとめたデータをCD-Rで全学校に配布
- ③ 学習内容が十分定着していない子供への補充指導，個別指導を実施します。

家庭における取組のお願い（※ H30全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙結果から）

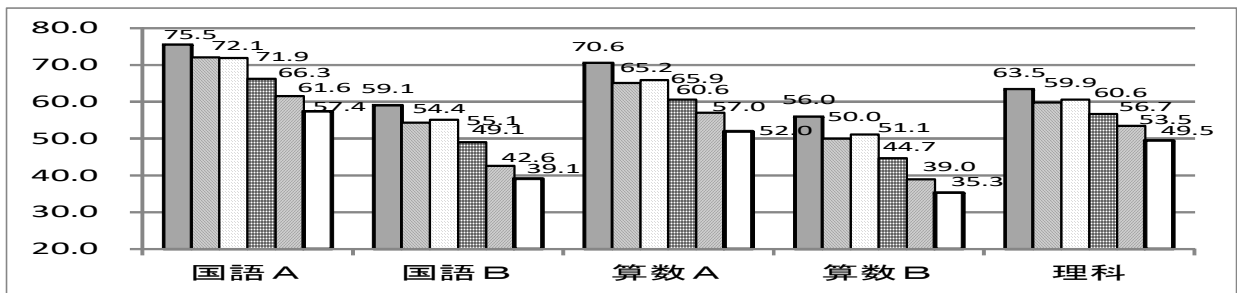
次のグラフから分かるとおり、学校外の学習時間は、学力調査の結果に大きく影響しています。また、家庭における規則正しい生活も子供の学力に大きく関係しています。

【参考1：家庭における学習時間と学力調査の関係】

学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）。

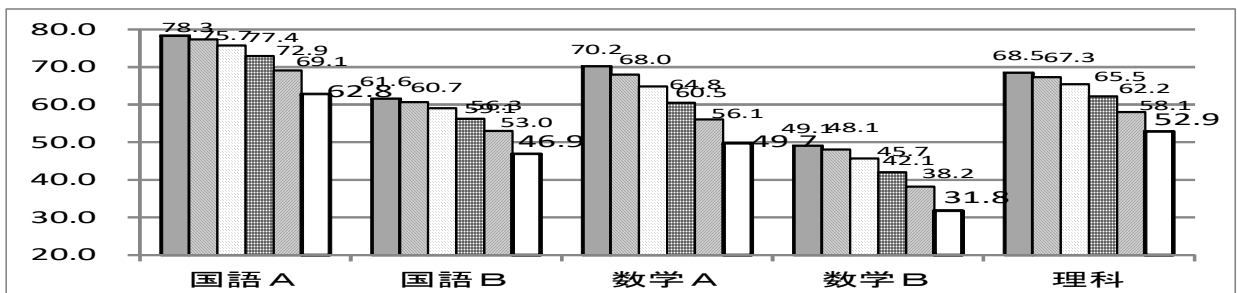
〔小学校〕

(平均正答率：%)



〔中学校〕

(平均正答率：%)



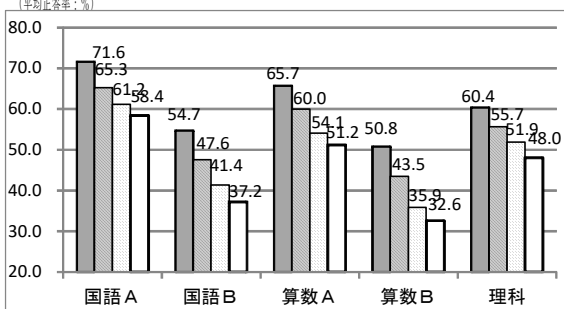
■ 3時間以上 ■ 2時間以上, 3時間より少ない ■ 1時間以上, 2時間より少ない
 ■ 30分以上, 1時間より少ない ■ 30分より少ない □ 全くしない

【参考2：生活習慣と学力調査の関係】

朝食を毎日食べていますか。

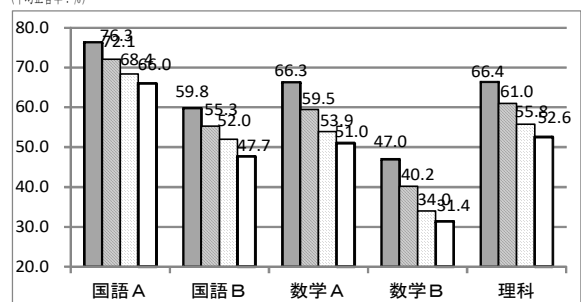
〔小学校〕

(平均正答率：%)



〔中学校〕

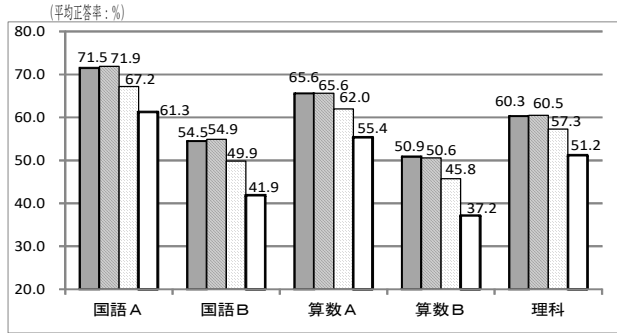
(平均正答率：%)



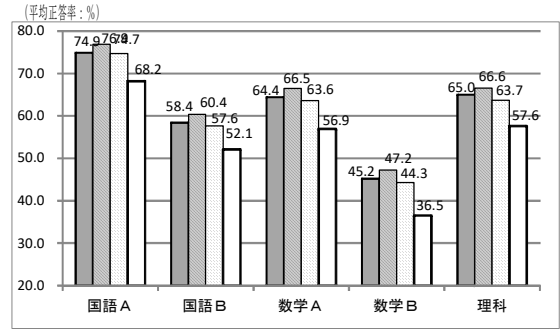
■ している ■ どちらかといえば, している ■ あまりしていない □ 全くしていない

毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。

〔 小学校 〕

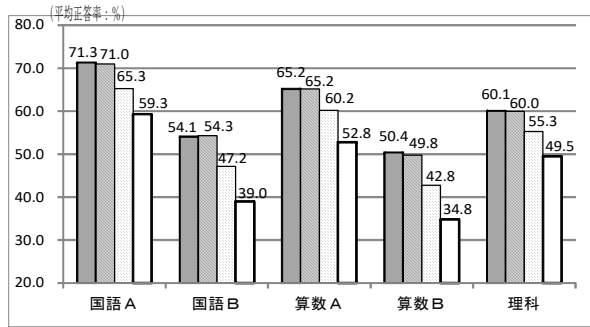


〔 中学校 〕

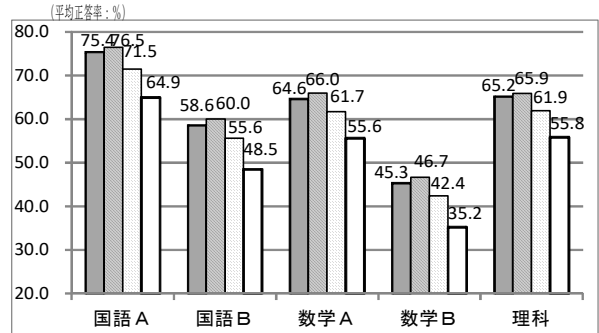


毎日、同じくらいの時刻に起きていますか。

〔 小学校 〕



〔 中学校 〕



- 学力向上に向けて家庭における学習の充実をお願いします。
- 規則正しい生活習慣が身に付いている児童生徒ほど学力調査の結果が出ています。朝食をしっかりとること、早寝・早起きなどの生活習慣の定着から取り組んでみませんか。